

1~3年次生に向け、記者生活で心がけていることなどを語る田中さん



専大卒記者とマスコミ内定者が講演

専修大学卒の先輩記者やマスコミに内定した4年次生が、報道記者の仕事や就職活動について話す「真夏のセミナー」が8月2日、生田キャンパスで開かれた。マスコミへの就職を希望する1~3年次生約20人が熱心に耳を傾けていた。

沖繩タイムズ記者で、現在は朝日新聞西部本社に出向中の豊島博さん(平30文)は、昨年末から今年初めにかけての朝日新聞の大型連載「タイパ社会」取材班に加わった。タイムパフォーマンス(時間対効果)を過

真夏のセミナー開催

寄稿 文学部ジャーナリズム学科4年 大森遥都

専修大学卒の先輩記者やマスコミに内定した4年次生が、報道記者の仕事や就職活動について話す「真夏のセミナー」が8月2日、生田キャンパスで開かれた。マスコミへの就職を希望する1~3年次生約20人が熱心に耳を傾けていた。

今春入局したNHKで記者として働く田中万智さん(令5文)は、コロナ禍の影響で4年ぶりの開催になった「神楽坂まつり」の取材経緯を披露。まつりが開催される地域の中華料理店の店主の思いなどを特集としてまとめ、ローカルニュース番



組で放送された。1年目の夏までに特集を制作したいという目標を達成し、「やる気があれば、新人でも大きな仕事を任せてもらえる」と話した。

今年、報道各社に内定した4年次生4人が就職活動を振り返り、早めの対策の必要性を伝えた。

度意識するようになってきている。社会の動きを、豊島さんの趣味であるお笑いや絡めて伝えた。「仕事の魅力は、自分の興味と世間の動きをフィットさせて記事を届けられることだ」と笑顔を見せた。

進路を自分の責任で決めることの大切さを伝える小林さん(左から2人目)

地元のブロック紙に内定した小林未来さんは、就職活動を始めた頃はアナウンサー志望だったが、やりたいことに気づき、記者として働くことに方針転換した。その経緯をもとに、自分の進路を自分で決めることの大切さを語った。また、全国紙に就職予定の是澤拓夢さんは、選考最終盤で何度も落選したが、モチベーションを維持しつつ、内定をつかみ取った。「目標を見失いそうになっても、ソニビのように這い上がれ」というメッセージで後輩を勇気づけた。

こまえスポーツフェスタ 体育会学生らが協力 スポーツの魅力伝える



大学生とスポーツを楽しむ子どもたち



研究成果を発表する学生



「ユニパッチン」専大バージョン販売中



応援しているチームのユニホームデザインに、好きな名前や背番号を入れられるユニホーム型アクリルキーホルダー「ユニパッチン」の専修大学バージョンが誕生。生田キャンパス総合体育館1階で作製することができる。

サッカー、準硬式野球、バスケットボール、野球の体育会各部に加え、全学応援団チアリーダー部、Sマークやセンティも選択可。価格は1個1000円。

地域とともに
社会貢献活動

8月24日に東京都狛江市の市民総合体育館で行われた「こまえスポーツフェスタ2023」に、専修大学スポーツ研究所(佐藤満所長)と体育会の学生らが協力した。大学が受付やミニゲームコーナーの運営に協力した。バスケットボールの会場では、バス、ドリブル、

レスリング部、バスケットボール部、バレーボール部、卓球部、全学応援団チアリーダー部の学生たちと、スポーツ研究所研究員で元サッカー韓国代表の李宇諤文学部教授が、各競技の講師を務めた。また、ボランティア活動研究会「樹々の会」が受付やミニゲームコーナーの運営に協力した。バスケットボールの会場では、バス、ドリブル、

シユートの基礎練習に続いて、学生と子どもたちの混成チームによる試合が行われた。ゴールが決まると、メンバー同士でハイタッチを交わすなど、大いに盛り上がった。指導にあたった部員は、「みんなでボールに触れ、楽しむバスケットボールの醍醐味を感じてもらえたと思う。子どもたちの笑顔が印象的だった」と話した。

初めてその競技を体験する子どもも多く、レスリング初挑戦の5年生の男子児童は、「飛行機投げや巻き投げなどの技が思ったよりも簡単にできて面白かった」とこっこり。

専修大学スポーツ研究所と狛江市教育委員会(柏原聖子教育長)は、

今年6月、スポーツや教育分野に関する連携・協働に関する包括協定を締結。今回のイベントへの協力は、その一環として行われた。

スポーツ研究所の齋藤実文学部教授は、「専大はスポーツに関する財産を多く有しているため、今後もそれらを地域に還元していきたい」と話した。

日語の夏フェス
ゼミ生が研究成果発表

国際コミュニケーション学部日本語学科で学ぶゼミのうち5ゼミの学生が、海外からの特別聴講生が発表した。

「夏フェスは、専門性の高いそれぞれのゼミの学びを相互に知り、交流を深める目的で、学部新設2年目の2021年から毎年開催している。これまでではオンラインだったが、今年初めて対面で実施。1年次から4年次まで、約90人が参加した。

10組(グループ)発表。また個人発表も。発表は文法、音声学、古典、コーパス(言葉のデータベース)など、テーマは多岐にわたった。このうち松永裕希さん(4年次)は中学の国語教科書について研究。独自にコーパスを作り、教科書に掲載されている

総語数や、特徴などを比較した。「同じ文章でも発行された年度によって【あがる】が【挙がる】と表記されたり【五〇〇】が【五百】となったり変更がある。今後はゆとり教育や学習指導要領との関わりなどについて検討していく」と話した。

8月まで齋藤達哉教授の下で学んでいたタイ商の感想が寄せられた。

聴講生のアルンラッタナコーン・メイサーさんも音声とスライドで発表。少年マンガにおける独特なルビ表記について考察した。

参加した学生からは「ほかのゼミの様子が分かり、有意義だった」とさまざまな視点からの研究を聞き、自分の視野を広げることができた「などの感想が寄せられた。

経営・青木ゼミ 社会課題考えるワークショップ実施



青木教授(左)の助言を受けながらビジネスプランを考案

経営学部・青木章通ゼミの学生たちが、社会課題解決のためのアイデアを考えるワークショップ(品川区)と、若者向け

「社会課題の解決とビジネスとしての収益性を両立させるプランを練るの」は思いのほか難しく、とても勉強になった。「私たち若い世代も積極的に発言や行動することで社会を変えられると感じた」と語った。

今回のワークショップには、石巻専修大学経営学部から国内留学中の学生2人も参加。専修大学ではグループワークの機会が多いと話し、「さまざまな人の考えに触れることで視野が広がった」などと手応えを語った。

に教育プログラムを提供する株式会社Inspire High(千代田区)の協力を得て、7月21日に生田キャンパスで実施された。

青木教授や2社の担当者からアドバイスをもらいながら、関心のある社会課題を設定し、その解決を目指すビジネスプランを考えた。

フードロスのテーマでは、出版社や著名人と協力して、食材の使い切りや役立つレシピ本を開発するプランなどがあがった。その他のテーマでは、ペットの殺処分問題に着目し、ペットと高齢者福祉施設をつなぐプランを発表したグループもあった。

参加した3年次生は、「社会課題の解決とビジネスとしての収益性を両立させるプランを練るの」は思いのほか難しく、とても勉強になった。「私たち若い世代も積極的に発言や行動することで社会を変えられると感じた」と語った。